
LOST MY WORLD AND.....

野澤優花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOST MY WORLD AND……

【Nコード】

N1173I

【作者名】

野澤優花

【あらすじ】

「妹を助けてください！」少年は少女と共に異世界へ。―君がそこにはないと思えるのは、きみが存在しているということ……。命の大切さがわかる、異世界系ファンタジー

Ｃ（前書き）

がんばれしゅじんこっつ。

C

僕が、いけなかったの？

それとも、君がいけなかったの？

わからない。

今でも君は、目を覚まさない。

そう、あの日から……――。

「暇！」

とある一軒家の一室のベッドの上に寝っ転がっている本城蒼夜ほんじょうそつやは
そう叫んだ。

今日は月曜日でただ今の時間は午前10時、彼はどう見ても高校一
年生くらいでこの時間ならば学校で授業を受けているはず。

「なんか見よ」

パソコンの電源を付ける。

「……あれっ？ 画面が真っ暗になった？！ ……えっ、なんだこ
のサイト？」

いきなりパソコンが付いたかと思うと、何もしていないのにおか
しなサイトが現れた。

『願いが叶うテディベア』

そう書いてあるところをクリックしてみる。

例えば、東京都出身のRさん、20歳。Rは以前から気になっていた男がいたが、その男には彼女がいた。しかしどうしてもその男のことが好きだったためこのテディベアを購入したところ、その男の彼女は三日後……。

「行方不明になった……恐っ！　っていうか呪いの人形じゃん！」

「このテディベアは、どんな願いでも叶えてくれます（かっこわらい）（笑）」

「かっこわらいっ?!　しかもたとえば一つしかないじゃん!　値段は……500円?!　……以外に安い……。……ま、どーでもいいや。買う人なんていないんだろうねっ」

そしてパソコンを切ったときだった。

がたんっ。

「?」

部屋の外から音がきこえたのでドアを開いてみると、そこにはかなり大きな箱がラッピングされて置いてあった。

「……………」

なんだこれ……。こんな箱、朝にはなかったな……。この家にはまだ僕以外いないのに。

とりあえずどうしよう。

「開けてみてもいい……。よな?　それにしても大きな箱だなあ……」
大きなリボンを丁寧に、というかすぐほどける縛り方だった、箱のふたを開けてみると……

「これは……。さっきの怪しいサイトのテディベア?!」

その箱の中には、大人の男性を軽く越えるほどの巨大なテディベ

アが入っていた。

ちよつと待て……僕は注文した覚えはないし、それに仮に注文していたとしても届くのがはやすぎるし、何で部屋の前に置いてあるんだ。

「まさか、そのサイトを開いたら自動で注文されてしまう悪徳サイト?! こういつのつてどうしたらいいのかな……やっぱ警察とか……でも大袈裟すぎるかな……ああーもう! どうしたらいいかわかんないよ! ……っつ???!」

こういう具合で何となく一人で騒ぎ終わったあとに再度その箱の方を向くと、その箱の中には先程のティベアではなく代わりに女の子が膝を抱えて目を閉じて座っていた。

……………。え? 女の子? なんで……。さっきは確かに大きなティベアが……この子……寝てるのかな、可愛いけど……。

「あ、あのー……」

女の子を起こそうと、頬に触れようとしたときだった。

「ちよつと待って!!」

「い?!」

僕は部屋の壁に頭を打ち付けた。それは何故かといえはいきなり女の子が目覚まして近づいた僕を突き飛ばしたからだった。

「良かったあ……」

その女の子はホッとした様な動作を見せると、僕の方を向いて口を開いた。

「あのっ」

「……………」

「すみません」

「テ」

「?」

「デディベアが人間に……？」

「えっと」

「そんなことない、僕は夢を見ているんだ」

「ちよっと……！」

「さーで、大型ゴミは明日出せたかなあ」

そういつて部屋を立ち去ろうとしたとき。

「お願いです……！」

「え………？」

僕が後ろを向くと、女の子はその小さな両手で僕の腕を掴んでいた。

「優依歌を……妹を助けてください！！」

C

「妹……？」

「これは夢なんかじゃないんです、現実です！」

その女の子は僕のほっぺをとて強く引っ張った、うん、痛いです、かなり。

「夢じゃない？ そんな、こんなことって……」

「本当です、信じてください！」

「いきなり言われても……」

「お願いします！ 早く助けないと……妹は……優依歌は……」

その女の子は、ぺたっと床に座り込んでしまった。

「ちよつと待って、落ち着いてよ……座って？」

とりあえず椅子に座らせる。

その子がありますとございましてと言って椅子に座った。

「……ごめんなさい……」

「話がよく分からないよ。……妹さんが、どうしたの？ 君は一体

……」

「私、菜^なノ花^{のか}っていいいます」

桜色の髪を揺らし、その長い手足はモデルの様だった。

「僕は、蒼夜。えつと……菜ノ花さん？ 何があったの？」

僕も自己紹介をすると、菜ノ花さんは頭はゆっくり下げた。

「妹が……殺されそうなんです……」

「えっ？」

突然のことに、あまり驚けなかった。

「私の妹は、優依歌っていいいます。2年前に両親が死んで、優依歌は、唯一の家族です」

「……それで、どうしたの？」

「私は……異世界から来ました」

「異世界？　ってえええっ？　……ええっと、地球の人じゃない
って……事……？」

「はい。その世界は、魔王ジユダによって支配されています」

「ジユダ？」

「ジユダイン・ダークライト・ハーデスカス、私たちの世界の王です。ジユダは、自分に逆らった者は女子供関係なく次々と抹殺していく、恐ろしい男です」

「何て、酷い奴なんだ……」

「そして……奴らに妹が、捕まってしまったのです……！」

「ええっ！」

僕は驚いて後ろに後ずさった。菜ノ花さんは僕と同じ年くらいだから……妹さんは僕より年下くらいかな……捕まっちゃって……それじゃあ……。

「でも……まだ、おそらくは殺されないと思います」

「え、どうして？　次々と……人を殺している奴なんだろう？　その

……妹さんも刃向かったりしたの？」

菜ノ花は、顔を上げて言った。

「妹は……力を持っているんです」

「力……？」

「……予知能力です」

「……予知能力って、未来のことが分かる？」

「……はい」

「信じられない……」

予知能力、異世界、そこから来た女の子、魔王……何がどうなっているんだ……？

「……。ジユダは、この世界よりも大きな世界をあっという間に支配してしまう恐ろしい力の持ち主です」

「僕らの世界より、大きな世界を……」

「はい、そして……」

「？」

「ジユダは私たちの世界だけではなく……全ての世界を我がモノにしようとしています」

「全ての世界……ってことは、地球も？！」

「おそらく……」

「そんな……！」

「ジユダは、野望が叶うまで妹の力を利用します」

「そうか。予知能力さえあれば、計画は簡単だ」

「でも、野望が叶ったとき、妹は用無しになります。そうすれば、きつと……」

「……殺される」

「そうなる前に、ジユダを倒さなければなりません……！」

菜ノ花は、少し震えていた。

「そうだね、僕たちにも関係あることだもんね……」

「そこで本題です」

「え、今のは本題じゃなかったの？！」

「はい」

「で、その本題って何なの……？」

「ですから……助けてください!」

菜ノ花さんは僕の手を握って、さっきより大声で言った。

「え、話を聞いただけじゃ……」

「いいえ、戦うんです!」

「戦う?! どうやって?!」

菜ノ花は自分が入っていた箱の中に手を入れ、何かを取り出してきた。

「これをどうぞ」

「……なにそれ」

「なんか……どこかの……剣、みたいなものですかね」

菜ノ花さんは首をかしげる。可愛いけど何か持ってるモノかなり物騒だよ。

「うん、何かこんな感じの剣ってゲームに出てくるね……」

「げーむ……?」

「こっちの世界にあるおもちゃだよ。本物みたい、かつこいいなあ」
「気に入ってくださいましたか?」

「んんー……まあ」

「それでは、ジユダと戦ってくださいさるんですね?!」

「え、それはちよつと……」

「ありがとうございます!」

「菜ノ花さん、人の話を聞こう」

「それでは早速参りましょう!」

「人の話を聞いてえええつつ!!!!」

そして、僕の目の前は真っ暗になった。

D

——ねえ、あそこの信号まで競争、蒼夜は男の子なんだから僕に勝てなかったらアイスをおごる、いいね。ボクに勝っても何もないけど、えへっ。

ええ、そんなあ。全く、……は、いつもそうやって不公平な条件を……で……だから——。

「蒼夜さん、蒼夜さん！……もう……起きてください！！」

「ん……ここは……？……ごわっ?!」

僕の手を持ち上げて起こそうとしていた菜ノ花さんは、起きた瞬間、パツと手を離してしまった。

「すみません……大丈夫ですか？」

「ありがとう、大丈夫だよ」

「良かったあ……」

「ごろごろどっしやーん！」

金色の閃光が、上空を通過する。

「うわぁ！……ここは一体……」

「ここが、私の住んでいる世界です」

菜ノ花は静かに言った。雷はあまり好きではないのに……。

「なんだか、不気味だね」

「ジユダが現れるまでは……平和な世界だったんです……」

「そう……」

「……あの城です」

菜ノ花さんが指さした方向を見るとそこにはいかにも魔王の城という様な、真つ黒な城がそびえ立っていた。心なしか、邪悪な妖気のようなモノを感じる……。

「あれか……って、菜ノ花さん！」

「どうされました？」

「こつちの世界には来たくないって……」

「でも、来ちゃいましたよ」

「……そうだね」

菜ノ花は心配そうな顔をしてくる。

「帰りたい……ですか？」

「僕みたいな人間が戦うなんて……ムリだよ」

「それで帰りたい……と？」

少し考え込んで、菜ノ花は真剣な眼差しで言った。

「それでは尚更、ジユダを倒してください」

「や、だからジユダとは戦いたくないって……」

「帰れません」

「え？」

「ジユダを倒さなければ、蒼夜さんは帰ることはできません」

「なんで、どうして……？」

「この世界は、ジユダが支配しており、異界を行き来するときは、ジユダの許可を取らなければなりません」

「え……じゃあ菜ノ花さん、今僕がここにいるのは……」

「はい、すでにジユダの手下によって知られており、もし元の世界

に帰ったとしても、きっと、蒼夜さんの存在を消し去りに来るでしょう……もう残された選択肢は、ジユダを倒すしかないのです」

「僕、頼りないよ？」

「そんなことないです！」

「弱いし……取り柄ないし……あんな事が、あつたあとなのに……」

蒼夜は頭を抱えてしゃがみ込んだ。

違う、違うよ……僕は……を助けるために……。

「蒼夜さん」

静かに目を開けると、そこには僕の手を優しく握ってくれている笑顔の菜ノ花さんがいた。

「まだ私、蒼夜さんと出会ったばかりであり貴方のこと分かりませんが……でも、取り柄だったらたくさんあります。多分」

「多分?!」

「はい！」

菜ノ花さん超笑顔。

「なんだか複雑な気持ち……」

「えへへっすみません」

でも、少し心が安らいだ気がする……。僕でも、できることがあるのかな。

「わかった……菜ノ花さん、協力するよ」

「本当ですか?!」

「うん。何もできないかもしてない。だけど、頑張ってみる」

「蒼夜さん……！これから、宜しく願います」

菜ノ花が右手を差し出す。僕も右手で握り替えした。

「こちらこそ」

頑張ろう。妹さんや菜ノ花さん、そして、君のためにも……。

「そろそろ、出発致しましょうか」

「そうだね」

僕たちは、城の方へ向かって、歩いていった。

E

——ダークライト城 一室。

一人の少女が、椅子に座って泣いている。少女はすみれ色の髪を持った少々小柄な女の子で、真っ白なドレスに身を包んでいた。

「ぐすっ……いやだ……こんな力……無ければ良かった……」

コンコン。

「?!」

「入ってもよろしいですか？」

あいつの声だ…。

少女は涙をぬぐい、髪を整えて言った。

「…どうぞ」

「失礼致します」

入ってきたのは、少女よりも大人びて見える少年で、どちらかといえば青年に近かった。漆黒の少し長めの髪を一つに縛り、その端正な顔つきは笑みを絶やさない。

「気分は如何ですか？ 予言者さん」

「シェイド・バークライカン……何のようですか」

「麗しき姫の御顔を拝見しに……」

シェイドは少女に近づいた。そして、触れようとする。

「出て行ってください！」

少女はその手を払いのける。シェイドは残念そうな顔をしたが、しかし、微笑んでいた。

「冷たいですね。話し相手になって差し上げようと思いましたのに」

よう」

「……………」

シェイドが剣をしまつと少女は床にぺたんつと座ってしまった。そして、シェイドを睨み付ける。

「思ってもいないことを、簡単に口にしない方がよろしいですよ」

「……………」

「未来の私は……どんな人間ですか？」

「……………」

「……………」

「……貴方は一体何をしたいの？……貴方は何者なのよ?!」

「さあ、私にもよく分かりません」

「……………」

「貴方は、無駄と分かっているても何故、先程から抵抗するのですか？」

「自分の力が嫌いだから……認めたくないからよ!!」

少女はシェイドに見下されているように感じたのか、身を前に乗り出して叫んだ。

何故か、シェイドの顔から少し笑みが消えたように見えた。

「そうですね……貴方は強い方なのですね。……羨ましい」

「?」

「私は弱い……現実から逃げるばかりです」

「何を……………」

「……………」が

「え?」

何を言ったか聞こえず、そのままシェイドは部屋を出ようとしたが、何かを思い出したらしくこちらにくるつと方向を変えた。

「?」

「貴方は、私が気づいていないとお思いですが……………」

「……………」何よ」

「とぼけたって無駄ですよ。まあ、この城の能無しの魔王様は気づいていないようですが」

「……私は」

「無事に……助けに来てくれると良いですね……お姉さん達」

耳元でささやかれ、少女はバツと身を翻した。そして、震えた。

「何で……？」

「何故知っているか？ さあ、存じません」

「……」

「ただ……」

「……？」

「私、勘が良いんですよ」

「何それ……」

「何って、きいての通りですよ」

「ふざけないですよ！ ……ひゃっ?!」
ドン。

少女の細い腕はシェイドによって完全に押さえ込まれ、壁に押しつけられ、身動きが取れなくなる。シェイドの顔が近づいてきたかと思うと、ぎゅっと目をつぶる。

「おや、顔が真っ赤ですよ？ ……それにふざけてなどいません。私は常に至って真面まこもです」

シェイドが少女の耳元から離れ、手を離すと、少女はまた、床に座り込んでしまった。

「……」

「では、私はこれで失礼致します」

シェイドは笑顔で部屋の外へ出て行った。足跡はだんだん遠くなり、聞こえなくなった。

残された少女は、震えながらも呟く。

「何で？ …… どうして知ってたの？ …… お姉ちゃん！」

その声は、誰にも聞こえない。

E

「菜ノ花さん、少し休憩しようよ」

「そうですね」

僕たちは一時間ほど色んな道を歩いた。

先程より、城は近くなった。

「あと、もう少しになったね」

「はい」

「それにしても、とても危ないし、自分の命をかけてまで妹さんを助け出すなんて、よほど、その……優依歌ちゃんのことが必要なだね」

「……………」

「菜ノ花さん？」

彼女は、下を向いている。そして、顔を上げ、口を開いた。

「私、優依歌のこと嫌いだったんですよ」

「え？」

すぐに菜ノ花は笑顔になった。

「でも、今となっては大切な存在です」

「何が、あったの？」

「……この世界は、魔法や不思議な力を持って生まれてくる子がたまにいます。優依歌もその中の一人です」

「……………」

「優依歌は物心付いたときから予知能力を持っていました。両親はとても喜びました。しかし、私は優依歌の予言の力は嫌いでした」

「……………」

「両親は優依歌ばかり可愛がり、何の力もない私は、周りから優依歌と比べられ、時には馬鹿にされ、とても憂鬱な日々でした。でも、唯一の妹だから、その時は優依歌が可愛くて大好きでした。」

「……あの事件が起こるまでは……」

「あの事件？」

「ある日、私と優依歌はいつものように仲良く、外で遊んでいました」

「……………」

「そのころ、ジユダは優依歌の予知能力の噂を聞き、数人の手下達と私たちの家にやってきて、優依歌の居場所を言わなかった両親を……殺してしまったのです」

「酷い……………」

「そして、ジユダ達は優依歌が近くにいないと知ると、しばらくして引き上げていったそうです」

「……………」

「帰ってきた私たちは、言葉を失いました。かろうじて息のあった母は、『優依歌、優依歌』と言って、息を引き取りました。また、優依歌……………」

「優依歌ちゃんはその事件のことを予知できていたはずなのに、どうして言わなかったの？」

「理由は分かりませんが……優依歌は予知したことを他人には言わないのです。それを知っていたのに、私……私は……………」

『何で言わなかったのよ！ 優依歌のせいよ！ 優依歌が予知したことを隠さずにちゃんと言ってくれたらこんなことにはならなかった。』

お父さん達の代わりに…… あんたが…… あんたが死ねばよかったんだ……！』

「そんなことは……」

「分かってます！ 言っではいけないことだって……！」

「菜ノ花さん……」

「その時はまだ……何が起こったのか把握できていませんでした。気が付くと、優依歌が涙を必死にこらえていました」

「……」

「そして、自分が言った事に気が付いたときには、自分で自分を追い込みました。取り返しの付かないことを言ってしまった……私と優依歌の間に、大きな壁ができました」

「……」

「その後、私たちは隠れるように生活してきました。満足に外を歩くことさえできず、学校にも行けず……辛かったです」

「学校にも……？」

ドクン。

心臓の高鳴りが、今一瞬早くなった。

嫌だ、あの記憶は思い出したくない……！

違うよ、違うんだよ……夕……夜。

「でも、一番辛かったことは、優依歌が……『ごめんなさい』って、謝ったことです」

君も、謝っていた。

「本当は私が謝らなきゃいけないのに、優依歌が謝って、私、どうしたらいいのか分からない……！！」

違う。謝るのは、君じゃない……！

「あり……がとう」

「え？」

僕は何故か菜ノ花さんに言っていた。

「気持ちを言葉にするのって難しいよね。僕も、苦手なんだ」

「……………」

「でも、菜ノ花さんは一生懸命に話してくれた。気持ちが凄く伝わってきたよ」

「……………」

「妹さんに、謝ってないんだよね？」

「……はい。謝りたくても、どうしたらいいか……………」

「菜ノ花さんの気持ちを、ありのまま伝えたら？」

「……………」

「優依歌ちゃんを助けたら、一番に謝ると良いよ」

「蒼夜さん……………」

「さあ、そろそろ、行こうか」

「はい！」

菜ノ花さんはとても素敵な笑顔になっていた。

——ダークライト城 最上階。

シェイド・バークライカン是一个の大きな扉の前に立つと、その扉を叩いた。

「入れ」

中からは、特有的な声がきこえてきた。それをきいたシェイドは扉を開けた。

「はっ、失礼致します」

入った部屋の中は暗く、ろうそくが所々についている。そして、一つの大きな影が、言葉を発した。

「なんだ」

「侵入者です」

「誰だ？」

「予言の血縁関係者です。それと……」

「他にもいるのか」

「はい、異国の世界の者です」

「許可をだした覚えはないが……良い度胸だ」

「今すぐ始末致しますか？」

「そうだな……それと……予言者を連れてこい」

「……はい」

そして、シェイドはその部屋をあとにした。同時に、自らの笑みを持ち……。

F

「ここが……ジユダの城か……」

「優依歌……」

「菜ノ花さん？」

「優依歌、優依歌！ どこにいるの？！」

「菜ノ花さん！」

「優依歌！」

「落ち着いて！」

「落ち着いていられない！」

「敵に見つかつたらどうするんだ！」

「そんなの知らない！」

「……菜ノ花さんっつー！！！」

「?!……」

その……自分でもビックリした……。

こんなに大きな声で叫んだのは、久しぶりだったから……。

菜ノ花さん、言葉遣いが変わるほど心配していたんだ……僕も、無事であつて欲しいと思うよ。

……でも、その気持ちの片隅に、まだ臆病な自分がいた。

……恐い……。

そんな自分に、嫌気がさした。

「大きな声だして、ごめんね……」

「……いえ」

「僕はただ、菜ノ花さんに落ち着いて欲しかっただけで……」

「私こそ、いきなり騒ぎ出してごめんなさい」

「えっと……僕が大声出したのは、菜ノ花さんのせいじゃないよ」

「え？」

「本当は、凄く恐いんだ」

「……………」

「僕は、凄い臆病なんだ。怪我とかやだし、この年でこんなこと言
つて、笑っちゃうよね……」

「……………」

「そんな臆病者な自分にイライラしちゃって、菜ノ花さんにあたっ
ちゃって……僕、かつこ悪いね……」

「かつこ悪くないです」

「え？」

「蒼夜さんは、かつこ悪くなんか 아닙니다。確かに蒼夜さんは、頼
りなさそうというか……」

「どうせ僕は……」

「でも、蒼夜さんはカッコイイです！」

「良いよ別に、お世辞とか」

「違います、きいてください！」

菜ノ花さんは僕の手を強く握った。

「人間は外見じゃないってよく言います。蒼夜さんに出会って……
その言葉に納得したんです」

「……………」

「優依歌と私の話、致しましたよね？」

「…うん」

「それを話したのは、蒼夜さんだけなんです」

「え……どうして僕だけに？」

「蒼夜さんなら、きっと真剣に話を聞いてくれるんじゃないかって、

思っ たんです」

「菜ノ花さん……」

「だから、そんなに自分をかっこ悪いだなんて、思わないでください！」

「……ありがとう。僕も、菜ノ花さんと喋っていると、勇気をもらえるよ」

「なんだか、ずっと昔から友達だったみたいですね」

「そうかなあ？」

菜ノ花さんは笑った。それがなんだかとても、嬉しかった。

――夕夜、僕にも、人を喜ばせることが、できるみたいだよ……―
|。

「侵入者とは、貴様らのことか」

「……！ ……誰だっ？！」

「私か？」

重くて、深い闇の底にあるような、邪悪な妖艶さを持ち、でもなんだか、幼い雰囲気を持った影が、目の前に現れた。

「私が、この世界の王、ジュダイン・ダークライト・ハーデスカスだ」

「お前が……」

「我が城へようこそ」

雪のような白髪はくはつを持ち、

「たった二人で我が城へ、勇敢だ」
瞳の色は金。

「不法侵入だそうだな」

でも、背丈は僕よりも小さくて。

「それ相応の罰を与えなければならない」
とても綺麗な子供で。

「どんな罰がいい？」

なのに、僕は一步もそこから動けなくて。

「どうした？ 恐怖で声すら出ないか……惨めだな……」

恐い。

逃げたい、逃げたい！！

体中の震えが止まらない……。

F

——なんで……？……ボクは何かしたの……？

——蒼夜のせいだ……！ボクを……ボクを壊したのは……蒼夜だ……！

——ごめん……ごめんね……蒼夜……。

——ありがとう……蒼夜は……約束を守ってくれたんだね……。

——蒼夜……君は……ボクの分も生きるんだよ……——

……だけど、悔しい。

……僕は、僕は変わるんだ……！

「やめる……」

「何だと？」

「全ての世界を征服するのをやめろ……！」

「知っているのか、なら話は早い」

「それと、彼女の妹を返せ！」

「優依歌は無事なの？」

菜ノ花さんは身を乗り出す。ジユダは黙っている。

「……………」

「質問に答えてください！」

「知りたいか？」

「……………はい」

「シェイド」

「はい」

ジユダの後ろの暗闇から二つの人影が現れる。

一人は黒髪を持った長身の青年、一つは真っ白なドレスを着た……
菜ノ花さん？！

「優依歌！」

菜ノ花さんは動いていた。ということは、あれが優依歌ちゃん？
髪の色や目つきは妙に違うけど、その子は、菜ノ花さんの妹さん
だと確信が持てる。

菜ノ花さんが優依歌ちゃんに駆け寄ろうとすると、シェイドと名
乗る青年は懐から剣を出し、菜ノ花さんに突き出した。菜ノ花さん
は寸止めのところで止まる。

「お姉ちゃん……………！」

「無事で良かった……………。すぐに、助けるからね……………」

「うん……………」

「ジユダ……………優依歌ちゃんを返して貰う」

「やーだ、と言ったら、貴様はどうする？」

「力づくで奪い返す……！」

「そうか……………。ならば私が直々に葬ってやろう」

ジユダは、自分の背丈よりも大きな槍を手の中に持っていた。

「そうはさせない！……菜ノ花さん、僕は逃げないよ」

「……」

「僕には、守るモノができたから」

「蒼夜さん……」

「シェイド」

「はい」

「予言者をしっかりと捕まえておけ」

「かしこまりました」

すると、シェイドは優依歌ちゃんを縛っていた縄をほどき、優依歌ちゃんの首に自分の腕をかけた。

「や……！」

「優依歌！……！」

助けようと近づく菜ノ花さんだったが、シェイドの剣によってまともや止まってしまい、そこにぺたん……と座り込んでしまった。

そして、ジユダは口を開く。

「貴様、そんなふざけた武器で、この私に勝てるとも思っているのか？」

「う、うるさい！ 勇者はこの武器で、最後の魔王を倒すんだ！」

「ああ、知っているぞ。勇者とは、愚民共を助けてくれる奴のことだろう？ さほどの力も持っていないのに、愚かな奴だ」

「違う！ 勇者ってのは、皆に勇気を与える存在だ！」

「……まあいい。いきなり殺すのおもしろくないな……少し遊んでやろう」

ジユダを僕めがけて走ってくる。

僕はただのサッカー部だったので戦う技術は持っていません！

とりあえず逃げまどう。

「蒼夜さん！ 何か、何か呪文でも言ってみてください！」
なぜか菜ノ花さんが叫んでいる。

「待ってえ！ これはただの剣だよ！」

「実はそれは、マジカル李莉子ちゃんのまじかるすてっきなのです！」

「何その設定！」

そう叫んでいるうちに、ジユダは僕の剣をしっかりと槍で抑えていた。見た目は子供なのに、かなりの力だ。

「どうした！ 押されているぞ、貴様は口だけが立派だなあ！ それに、貴様の武器、使い物にならんだろう」

「あ、折れてる！」

「……大人しく降参したらどうだ？」

……どうしよう。

G

やばい……どうしよう！
その時だった。

「蒼夜さん！」

菜ノ花さんが僕の腕を引っ張って、ジユダよりさほど遠く離れた。
何か知らないけど、ジユダ様待ってる。ヒーローが必殺技を出す
ときに避けないで待っててくれる敵みたい。

「使ってください」

「これって……」

「武器です」

「……ネギじゃん！」

「大丈夫ですよ！」

「何が?!」

「人を傷つけることはありません」

「傷つけたくてもできないよ！ むしろ僕の命が危ないよ！」

とりあえず折れた剣を凄まじい真顔の菜ノ花さんに渡し、ネギを受け
取った。

「落ち着いてください」

「落ち着いていられるか！ ネギだよ？ ネギを包丁で切ったらど
うなる?!」

「……………」

菜ノ花さんは素敵な笑顔になった。

「何で無言になるの?! 何か言ってよ、心が壊れそうなんですけど!」

「蒼夜さんって……鋼のハートじゃなかったんですか?」

「違うよ、僕はガラスのハート!」

何かそんなこんなで菜ノ花さんとコント(?)をしているうちに、武器だかネギだか知らんが……」

ジユダは真後ろにいた。菜ノ花さんは僕の後ろに隠れる。

その時、シェイドは優依歌ちゃんを放した。崩れかけた優依歌ちゃんに菜ノ花さんは走っていき、しっかりと支える。

ジユダはそんなことには目もくれず、

「……まあいい……遊びの時間はここまでだ……死ねえっつ!!」

………っ?!」

一瞬何が起きたのか分からなかった。

菜ノ花さんは優依歌ちゃんを守るように抱きしめていて、僕は頑張ってジユダの攻撃を避けて、ジユダの小さな体を、シェイドの剣が貫いていた。

「億劫だ……」

「シェ……シェイド……貴様……裏切ったのか……? ……ぐっ!」

吐血。血、血。赤い血。

——救急車を呼べ！

少年が血を流して倒れているぞ！

サイレンの音、野次馬のざわめき。

許さないよ……蒼夜……ボクは君を……絶対許さない……。

紅く染まった目、夕暮れの空。

………夕夜………！

「裏切った？ はは……まさか。私、元々貴方にお仕えしようなんて、思ったことありませんが？」

「………っかは………！」

「私を信じた、貴方が愚かだったんですよ」

「シェイド……昔のことを忘れたのか………？」

「昔？ ああ、忘れるわけがありませんよ」

「ではなぜ……おまえをここまで養ってやったのに………」

「養った……？」

「シェイドはもしかして、ジユダに拾われたのか？」

「シェイドはクククツと笑うと、口を開いた。

「あの日、私は貴方を信じました。しかし、貴方の本性を知ってから、今日まで貴方を殺すことしか考えていませんでしたよ」

「何………だと………」

「今までありがとうございます。そして………もう逢うことはないでしょう………」

「ぐっ!!」

「やっと叶いました……無様な姿ですね!」

シェイドはジユダの細い体にもう一度剣を突き刺し、そして、ジユダは闇の中へと消えていった。

G

「……お前、何とも思わないのか？」

「何がですか？」

気が付くと、僕はシェイドに対して問いかけていた。シェイドは笑みを浮かべる。

「仲間を殺して、人を殺して、悲しくならないのか！」

すると、シェイドはよりいっそう高らかに笑い始めた。
そして。

「……面白いですね、貴方も」

「何が！」

「その正義感ですよ」

「僕は間違っていない！」

「そうですね？ 間違っている人ほど、そうやって言っんですよ。他人の人生など、私にとっては玩具なんです」

「何だと！」

「飽きたんです」

「……？」

コイツは何を言っているんだ…？

「子供だってそうじゃないですか。最初は興味がある玩具も、飽きれば棄てますよ、それと同じです。私だって人間なんですから」

菜ノ花さんと優依歌ちゃんは、不安な表情を浮かべている。それとうってかわって、シェイドは微笑わらっている。

「どんなに悪い人間でも、どんなにむかつく人間でも、みんな両親が一生懸命に産んで、育ててくれたんだよ！ 君だって、そうなん

だよ！」

すると、シェイドの顔から笑みが消えた。

「くだらない」

「え？」

「……世の中には、両親が願ってもいないのに生まれ、暴力を受けたり、殺される者だっているんですよ。……私のように」

「え……」

「……私、生まれつき魔法が使えるんですよ。両親は私の力を不気味に思い、私を化け物扱いしました。暴力はもちろんのこと、幾度も殺されそうになりました。でも、それが自分の運命だと思って諦めていました」

「お前……」

「しかしそんなある日、ジユダが私の両親を殺しました。そして彼は言いました。

『お前を救うために殺した』

私は彼を信じた。もう苦しむ必要はない、初めて人を信じた」

……この世界は、魔法や不思議な力を持って生まれてくる子がたまにいます。優依歌もその中の一人です

優依歌は物心付いたときから予知能力を持っていました。両親はとても喜びました。しかし、私は優依歌の予言の力は嫌いでした

菜ノ花さんの言葉を思い出す。不思議な力を持った子供達。優依歌ちゃんは幸せで、シェイドは幸せではなかった。

夕夜も……？

——……夕夜……何しているの？ 猫？

見て見て、蒼夜。可愛いでしょ、ボクが見つけたの。なんかご主人様に捨てられちゃったんだって……。昨日は車にひかれそうになって大変だったんだって……。うちで飼えないかなあ？

ちよつと難しいかもよ。夕夜、それ、この辺の近所の人から聞いたの？

ええー？ 違うよ、この子が教えてくれたの……。――。

A

「しかし私は奴の本心を知ってしまった」

——これはお母さんには内緒だよ？ 大人って現実的じゃないモノ見ると否定的になるんだもん。

「実際奴は無差別に、何の罪もない人々を殺していった！」

——どうして……なんで……？ ……ボクは何かしたの……？

「あの時私を救ったのも、ただ私の力が欲しかっただけ……私のことはどうしても良かったんです」

——ねえ、お母さんがうちへ帰ってきてくれないよ？

……蒼夜のせいだ……！ ボクを……ボクを壊したのは……蒼夜のせいだ……！

……お母さん！ 夕夜の……夕夜の元へ行っただけでよ！

お母さん！

……どうして私が、化け物の元へ行かなくてはなら
ないの……？

「私は悲しさと共に、絶望と憎しみを覚えました。……だから、私
は全てを破壊するのです。何も感じない、真っ白な世界……。もう
苦しみたくはないんです」

——ごめん……ごめんね……蒼夜……。

——ありがとう……蒼夜は……約束を守ってくれたんだね……。

——蒼夜……君は……ボクの分も生きるんだよ……——

「駄目だ……そんなの駄目だ……間違っている！」

「……」

「感情があるから人間なんだよ。悔しい思いをして、耐えて、た
くさん間違えて、僕たちは成長していくんだ！」

「貴方は私に……もっと苦しめと……？」

「違う！ 僕はただ君に……」

「貴方はジユダのような人ですね……人に苦しみを知らない、綺麗
事を言って人を騙す！」

「話を聞いてくれ！」

「……やはり貴方にも、消えていただきます」

シェイドは僕に剣を向ける。その時、先程からずっと震えていた彼女が声を上げた。

「……いけない……駄目よ！」

「優依歌？」

こっちに来ようとする優依歌ちゃんを菜ノ花さんが止める。

「シェイド・バークライカン……彼の未来が二つに分かれているのが見えるの……。一つは暗くてよく分からない……。でも、もう一つは、世界を消しているの！」

それを聞いたシェイドの顔にまた、笑みが戻る。菜ノ花さんは表情をこわばらせる。

「それでは、私の夢は叶うわけですね」

「そんな……」

「だから、速く逃げて！」

——蒼夜……君は……ボクの方も生きるんだよ……——

「今なら間に合う！」

「そうですね、命は助けてあげましょう」

——それで家族みんなで……

「ほら、だから……」

新しい家族を、迎えようねえ……——

「それは」

僕は口を開く。

「それは優依歌ちゃんの予言だろ？ 自分の未来は、自分で決めた
い」

——約束だよ、お兄ちゃん……——

「いつも何かから逃げている自分が嫌なんだ……だから……死ぬか
もしれないけど、最後くらいは……」

僕は、真っ直ぐとシェイドを見つめた。シェイドは無表情で剣を
鞘から抜くと、僕の方へ向かってくる。

思わず、目をつぶった……。

B

カシャン。

剣の落ちた音がした。目を開けると、シェイドが下を向いて立っていた。

「私は……貴方のような人になりたかった……」

そういうと、反対の鞘から短剣を抜いた。両手で持って構える。僕も思わず構える。

そして、その剣先は、彼の腹部へ……。

「何してるんだよっ？！！」

僕はシェイドから短剣を奪い取ると、床へたたき落とした。シェイドはゆっくりと顔を上げる。その顔に笑みはなかった。

「自分の運命を変えてやろうと……何度も思いました……。

でも、運命を変えたあと自分がどうなってしまうかと考えると……

…答えが見つからず、いつも不安で恐かった……。

でも貴方は違った……。何もできないし弱い人だ。

でも最後まで諦めずに戦った。そんな貴方を見ていたら……自分は情けなくて……」

「だからって……！」

シェイドは短剣を拾おうとする。僕が止めようとしたが、もう遅かった。

「来るな！」

そう言つて、僕に剣先を向ける。

そして、今度こそ、自分の腹部にその刃を突きつけた。

僕は叫んでいた。優依歌ちゃんと菜ノ花さんは顔を手で覆つ。

シェイドの体は、ゆっくりと崩れていった。

「おいっ！　しっかりしろよ！　死ぬな！」

「……………」

僕と……優依歌ちゃんは、シェイドに駆け寄っていた。菜ノ花さんはその後ろで、まだしゃがんでいる。

「何で、何でっ！　この世に消えていい命は、一つもないのに！」

「ねえ、見て」

「え？」

優依歌ちゃんの声をした方を向くと、シェイドは安らかな顔をしている。

「涙を流しながら、死んでる……………」

♪

♪~~~~♪~~~~

なんて、美しい涙。

優依歌ちゃんの音色は、シェイドを優しく包み込む。

「今度生まれ変わったときは、幸せになって欲しい」

「そうですね……きつと、大丈夫です……」

僕がそう言つと、菜ノ花さんは答えてくれた。

「お姉ちゃん」

優依歌ちゃんは、菜ノ花さんの元へ行く。

「……」

「……言いたいことが、あるの」

「待つて。私から、言わせて」

そして、ずっと言いたかった言葉を、告げた。

「ごめんなさい！」

「……」

「あの時、優依歌が予知したことを他人に言えないことを知っていたのに……取り返しの付かないことを言った。

優依歌がジグダに捕まったとき、凄く寂しくて……私……優依歌が大好きなんだなあって、思ったの。

だから、ムリかもしれないけど、昔のような、仲の良い関係に戻りたい！」

菜ノ花さんは顔を上げない。

「お姉ちゃん」

優依歌ちゃんは、菜ノ花さんの顔を上げていった。

「私も、お姉ちゃんのことを……大好きだよ！」

「優依歌、私……」

優依歌ちゃんは菜ノ花さんを抱きしめる。

「いいの、もういいの！」

「でも……」

「私が良いって言ってるんだから、大丈夫！」

「……ありがとう」

二人はまた強く抱きしめ合った。

そして、少しゆるまって菜ノ花ちゃんは腕をといた。

「……私が、予言を言えない理由はね……」

「え？」

「昔、間違った予言をして、たくさんの人に、迷惑をかけちゃったことがあるの……。それから、人に予言をするのが恐くなっちゃって……」

「そうだったの……」

「お姉ちゃん、これから、仲良くしてね！」

「……うん！」

二人はこちらへ走ってきた。

「蒼夜さん、大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫……あれ？……眠くなつて来ちゃった……」

「蒼夜さん?! 蒼夜さん、蒼夜さん……! ……」

「うわっ！」

目が覚めると、そこは僕の部屋で、そして、朝だった。

「いつの間に寝たんだったけ？あれ、パソコン付けっぱで寝ちゃったのかぁ……」

時計を見て思い出す。

「そつだ、今日は……」

「にゃあ」

「こいつを連れて行かないと」

鈴を付けた小さな子猫を抱いて、階段を降りていく。

「それにしても、可笑^{おか}しな夢だったなあ」

その足跡はだんだん遠のいていき、聞こえなくなった。あとには、パソコンの音が響く。

画面に書かれていた言葉は……――。

ありがとう

B キャスト（前書き）

話を読んでから見た方が良いと思われ、です。

B キャスト

ほろごころびしや
本城蒼夜

主人公。サッカー部に入っていた活発で心優しい少年だが、とある事件がきっかけで、心を閉ざしてしまふ。さすが主人公、ツッコミの腕は最強。

「『勇者』っていうのは、「皆を助けてくれる奴」じゃなくって、「皆に勇気を与えてくれる奴」なんだよ！」

なのか
菜ノ花

桜色の髪を持った異世界の少女。モデルのような体型で、かなり天然でのんびり屋な性格。唯一の家族の妹を大切にしている。天然過ぎて、時々直球な発言もする。

「人が皆、幸せになれるようにできているって知ってました？」

ゆい
優依歌

すみれ色の髪を持つ菜ノ花の3つ下の妹。菜ノ花にそっくりで、パツと見双子のよう。歌が得意で明るく、負けず嫌いで勝ち気な性格。ちなみに姉よりもスタイルがよろしい。

「奇跡っていうのは、最後まで諦めなかった人だけに訪れるの」

シェイド・バークライカン

黒髪を持つ18歳の少年。ジユダの城に住んでいる優依歌のお目

付役。敬語を使い、温和で物腰柔らかそうに見えるが、残酷な一面も持つ。

「夢は逃げません。逃げているのは、あなたですよ。」

ジユダイン・ダークライト・ハーデスカス

菜ノ花が住む世界の王。欲しいモノはどんな手段を使っても手に入れたい唯我独尊な性格。真っ白な髪に金色の瞳を持つ。

「後悔するくらいなら、反省しろってことだ」

ほんじょうゆつや
本城夕夜

蒼夜の双子の妹。少々男勝りで、髪をショートにした元気で明るいスポーツ少女。現在入院中のボクっ子。動物が大好き。

「空は、どんな人の上でも青いのね」

どうでもいいことシリーズ

菜ノ花ちゃんは蒼夜君より年上です。

生まれたとき、明け方で、空が青かったから蒼夜、その直後に夕夜が生まれたときは空はオレンジでした。太陽が昇ってきたんだね、早朝生まれなツインズ。

ちなみにジユダ様29歳。

ほんとは優依歌とシェイドくっつけようと思ってたー
さて、どこからが夢だったのか。

それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1173i/>

LOST MY WORLD AND.....

2010年10月28日01時54分発行